

書評：小畑弘己・坂元紀乃・大坪志子. 2003. 考古学者のためのドングリ識別法. 「考古学研究室創設30周年記念論文集 先史学・考古学論究IV」, 225-288. 龍田考古会, 熊本.

ドングリは、割と身近なものであるから、誰にでもイメージしやすいし、遺跡の発掘調査においても比較的大型であるため、微小種実と違って肉眼でも検出され易く、ドングリであることくらいはおおよそ検討がつくであろう。これまで遺跡報告書の中で、「ドングリ」の出土報告例は少ない。しかし、植物学的用語でない「ドングリ」という名称のみでは、それが落葉性の種類か常緑性の種類かわからず、種から考えられる利用法や加工法について解釈できないのはもちろんのこと、そのドングリに関する記載や種を識別しうる写真も掲載されていないことが多く、それが何であるのかを報告書から読みとることは不可能に近い。ドングリという用語自体の指す範囲が人によって異なることがあることにも問題があろう。しかし、そのドングリが何のドングリであるのか、属や種を識別するためには、それなりの知識が必要である。本書は、著者が考古学の立場でドングリの現生標本を採集・観察し、遺跡から出土するドングリを考古学者自身が発掘現場で同定できるように、その識別法をまとめたものである。識別法の提示だけでなく、遺跡から出土した炭化子葉から元の大きさや重量が復元可能であることを例示し、さらには識別法を適用した同定の実践例や、朝鮮半島・沿海州・中国に自生するドングリの紹介、これらの地域と九州・沖縄の遺跡出土のドングリの出土地名表と、内容は多岐に渡る。これまで考古学者によって観察・同定されることが少なかったドングリに対して、遺体と比較するために現生標本の採集から行い、あらゆる状況で出土するドングリを念頭に置き、果実・子葉の計測や炭化実験を行うなど、多角的に検討されている。本書が植物学者ではなく、考古学者によりまとめられたことを考慮すれば、それに費やされた労力は計り知れないものがあり、労作といえよう。

全体の構成は、1. 問題の所在と結論、2. ドングリの種類と特徴、3. 有殻果からみた諸特徴、4. 子葉（無殻果）からみた諸特徴、5. 出土ドングリの大きさからみた個体推定、6. 同定の実践例、7. 九州および周辺地域のドングリと出土遺跡、おわりに、となっている。

対象としているドングリは、コナラ属（採集のできなかったオキナワウラジロガシ、ツクバネガシ、ハナガガシを除く）、マテバシイ属、シイ属に含まれる17種であり、それぞれの樹木の特徴と分布域、果実と子葉の形態的特徴が記載され、果実・子葉・葉などの写真や実測図が提示されている。特徴的なのは果実・子葉などの実測図で、考古遺物のように精緻な図が複数個体掲載されており、各部位の特徴をつかむのに有効となっている。こうした果実や子葉の

諸特徴の観察を踏まえた後、果実の識別には、プロポーションから釣鐘型（カシワ・クヌギ・アベマキが含まれる）、ラグビーボール型（カシワ・クヌギ・アベマキ以外のコナラ亜属とアカガシ亜属）、3稜型（シイ属・マテバシイ属）の大きく3種類に分類し、花柱（本著ではいわゆる首から上の部分を指している）・座（ヘソ）などの形態的特徴を盛り込んだフローチャートが提示されている。また、子葉の識別には、フローチャートの提示はないが、長副比と、プロポーション、底部付近の窪みの有無・形状、子葉の割れ方などからほぼ識別可能としている。

本書の主たる目的はドングリの識別法を確立することであるから、この識別法の有効性が問題となろう。著者は、現生のアラカシ果実のプロポーションが非常に変異に富むことを確認した上で、プロポーションのみならず、花柱や座の形状などの細部に至る詳細な観察により、果実の識別点を見出している。フローチャートにもそれが盛り込まれているが、もっとも種類が多くプロポーションだけで区別が困難としているラグビーボール型の識別法については、まず亜属の識別点を提示すべきではなかっただろうか。ラグビーボール型には、アカガシ亜属とカシワ、クヌギ、アベマキを除くコナラ亜属が含まれており、これらをプロポーションで紡錘型、長りんご型、俵型、宝珠型の4種類に細分している。この点については、4種類に細分する前に、アカガシ亜属とコナラ亜属の識別点、すなわち著者も確認しているアカガシ亜属は首の部分が縞状を呈し、コナラ亜属は縞状を呈さず、毛しか生えていないという識別点を提示した方が有効であろう。なぜなら、プロポーションは、変異・変形・欠損などの理由で4種類の型にうまく当てはめられない場合があることが多分に考えられるが、縞状の有無は、グループに固有の特徴であるため、変異・変形を問わず、欠損があっても果実の先端が良好に残っていれば、確実にラグビーボール型とした果実を細分できるからである。さらに亜属レベルの特徴を提示することにより、それ以上の特徴が観察できず種の同定ができなくても、アカガシ亜属とコナラ亜属という亜属レベルの同定が可能になる。また、アカガシ亜属の識別には、プロポーションに加えて花被より上に位置する花柱・柱頭の形状を盛り込むことが有効であろう。岡本（1973）によれば、柱頭は傘状で外側を向くイチイガシ、花柱は短く太く、柱頭は急に舌状に開くシラカシ・アラカシ、花柱は細長く、柱頭はゆるやかに開くウラジロガシ・アカガシ・ツクバネガシといった識別が提示されている。むしろ、プロポーションが無意味というわけではなく、プロポーションのみならず、著者

がシノキ属の識別とした果実長などもフローチャートの適所に盛り込むことは有効と考える。

子葉の諸特徴の記述では、興味深い視点から識別を試みている。それは、2つの子葉が左右対称ではなく、クヌギ・アベマキ・カシワを除くすべてのドングリは底部付近の片側に窪みを持つが、この窪みの長さ・幅・深さは種あるいはグループによってそれぞれ異なる特徴を持つこと、また、ナラ類とクヌギ類がほぼこの窪みに沿って割れるのに対し、カシ類とシノキ類は直角方向や斜め方向に割れる傾向があるといった子葉の割れ方に着目している点である。識別は、これらの諸特徴と長幅比、プロポーシオンなどを総合的に踏まえて行っている。著者は、「とくにカシ類の類は割れ方によって様々な形状をとることから、ある程度の量的な保証がなければ確定できない部分もある」といった問題点もあることを指摘しており、個体（樹木）ごとの変異について、また検討の対象外とした種を含めた再検討の課題を残していることも触れている。確かに、本書で基礎資料とした現生標本は種ごとに採取の精度が異なるため、窪みの形状や割れ方が種あるいはグループによって本当に固有の特徴を持つのか、今後対象外とした種も含め、資料数を増加して追認する必要がある。しかし、著者の視点から見た諸特徴は、現在困難とされている子葉の識別の方法を確立し、普遍的な基準とする大きな可能性を秘めた提示と言える。

後半には、九州・沖縄地方のドングリおよびクリ、トチノキの出土遺跡リストが県別にまとめられており、朝鮮半島・沿海州・中国のドングリ出土遺跡についても触れられている。遺跡名、時期、所在地、海拔、出土遺構が網羅されているが、欲を言えば、今回記載された情報に加えて、出土部位と炭化か未炭化かといった個体に関する情報、同定報告者に関する情報も欲しいところである。リストに掲載されているクリは識別が容易との理由で今回の分析対象から割愛されているが、現生標本を見慣れていない人が遺跡から出土したクリ果実の破片とドングリ果実の破片を識別することは難しいのではないだろうか。また科は異なるが、堅果類として括られるトチノキも微細な破片や炭化したものになると、見慣れていないと識別が難しい。こうした遺跡出土堅果類の識別法の提示も欲しいところである。

この識別法は考古学の立場でまとめたものであるため、種の名称や現生の分布域などは図鑑等から引用されたのであろうが、名称（たとえばモンゴリナラ *Quercus mongolica* Fisch. ex Ledeb. が「モンゴリアナラ」となっているなど）や現生の分布（ナラガシワが本州近畿以西、四国、九

州となっている）などに現在考えられている見解と異なる点がある。また有殻果（無殻果）や無炭化など報告書ではみられない用語が使用されている。本書で紹介されている伊藤（2001）のドングリの図鑑は読みやすいが一般向けの図書であり、種や分布の記載には、報告書の種実遺体の記載で利用されている平凡社の図鑑（佐竹ほか、1989）や、岡本（1973）が行ったドングリの記載などを引用するべきであろう。しかし、10年程遺跡出土のドングリ類を見てきた経験側からすると、文献があったとしても実際の同定には著者が行ったように現生標本の観察も必要で、これら文献とあわせて知識を深めることが必要である。

以上、さまざまな点を指摘したが、そもそもドングリに関する文献と言え、岡本（1973）のような詳細かつ大変読み易くまとめられたものがないわけではない。これには、先述したアカガシ亜属の識別点を盛り込んだ簡潔・明瞭な検索表も提示されている。しかし、著者が冒頭で嘆いているように、考古学研究者が必要とする文献が少ないという現状があり、どうにかして炭化子葉を識別できないかという切実な思いから本書はまとめられたのである。考古学側から植物の現生標本を収集し、詳細な観察・計測、記載を行った上で同定する実践例が示された点は、遺跡出土の植物遺体を把握し、解釈する上で非常に重要であり、著者の研究姿勢は高く評価できる。遺跡発掘現場で、ドングリの出土状況をもっとも詳細に把握できる考古学者が、ドングリの種をある程度識別できるようになれば、おのずとドングリピットをはじめとする植物遺体の調査方法も異なってくるであろう。また、出土したドングリを植物学者と協力して同定し生態学的視点を含めて産出状況を解釈することで、ドングリの遺跡における新たな位置づけを提示できる可能性がある。ドングリに限らず、その他の堅果類も含めた植物遺体の調査方法・同定作業は、考古学者と植物学者が協力し合い、互いのレベル・アップをはかるよう努力していく必要がある。今回扱わなかった種を含めた次回作に期待したい。

引用文献

- 伊藤ふくお（北川尚史監修）. 2001. どんぐり図鑑. 79 pp. トンボ出版, 大阪.
岡本素治. 1973. どんぐりの話. Nature Study No. 19: 59-61, 77-78, 91-94. 大阪市自然史博物館, 大阪.
佐竹義輔・原寛・亙理俊次・富成忠夫, 編. 1989. 日本の野生植物 木本 1. 321 pp. 平凡社, 東京.
(新山雅広・佐々木由香)